

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：S R S株式会社

定 価：一部30円

2013年4月20日

第360号

## 母子家庭

理事長 稲松 義人

先日、三方原スクエアのあるユニットを担当している女性職員の一人が雑談の中で、「各ユニットはまるで母子家庭のようです」と、率直な思いを漏らしてくれました。組織的にいうと、私は施設経営の最終責任者ですから、施設の現場からの訴えと受け取るべきなのではないでしょうか、経営責任を糾弾するというのではなく、素直に苦勞を話してくれたように感じられ、ちよつと嬉しく感じました。

三方原スクエアでは、60名を6名ずつのユニットに分けて、知的ハンディのある人たちの生活を支援しています。ユニット毎に違いはありますが、基本的にはユニット5〜6名の入所者を職員一人で支援する時間が長いのです。その状態を、まるで母子家庭のようだというのです。母子家庭ということは、支援を受ける入所しているたちを「子ども」にたとえ、働く自分を「一人で苦勞する母親」に見立てたということなのでしょう。苦勞は多いのですが、そこは「生活の場」が感じられ、私には「母子家庭」という表現から、暮らす人たちへの愛情を感じたのです。その生活の中から出てくる愚痴を、距離をおいて見られがちな理事長に素直に伝えてくれたことに温かさを

感じたことも嬉しかった理由の一つです。

小羊学園では開園以来、先輩たちが「家庭的な施設にしたい」と思ってきたのではないかと思います。入所してくる子どもたちにとつて、施設は家庭ではありませんが、せめて「家庭」のような雰囲気を感じられる施設であることを目標にしてきたということだと思います。考えてみれば、若樹学園（現支援センターわかぎ）を小舎制で建てたことも、小さな単位で生活できるようにという思いからでしたし、日中活動は、できれば別のところに出かけていけるようにということも、生活の場は「家」の代わりという意識をもちたかったからです。小羊学園児童寮・青年寮から三方原スクエアへの建て替えにあたって、生活の場と日中活動の場を空間的に分け、生活の単位を6人にしたのもその延長線上にあるのです。まるで「母子家庭」のようだという表現は、「大変だけれど、ここがこの人たちが暮らす場所です」という意味に聞こえてちよつと嬉しかったのです。

昔我が家でも、私がなかなか仕事から戻らないので、妻から、「母子家庭のようだ」と言われたことがあります。まだ手のかかる4人の子どもの育兒、あるいは家事に精一杯向き合っていた妻から、期待するときにほとんど家にはない私への不満の表現だったのだらうと思います。そのことを弁解するつもりもありませんが、想像ですが一般的に見ても、我が家以上に家庭のこと、子どもの日常に関わることに追いつめられている母親が多いような気がします。父親としてのフオローが少ないことは、家族としての反省すべき点ですが、現実には子どもと関わる時間、家にいる時間が短いのも現実です。それでも最近の若いご夫婦は、共働きが多いこともあつて、私の頃よりも二人で育兒や家事を分担している人たちが増えているような気がします。

そんな時代ですが、在宅支援での関わりで、深刻な家庭の事情に向き合うことが増えていきます。たとえ家族が精一杯協力したとしても、社会的な支援が必要な場面があるようです。実際に母子家庭の場合はなおさらです。施設の中の「母子家庭」のようなユニットで働く職員も孤立しないこと、自分だけで苦勞を抱え込まないことが大切なよう気がします。家庭でいえば、家族だけで完結するような内向きの家庭ではなく、母子家庭であろうがなかろうが、地域社会とのつながりのある家庭であることが大切なように思います。必要に応じてお互いに支え合える家庭や地域のつながり（子育てや介護の場）をコミュニティと言うのだと思います。

三方原スクエアでの新しい実践も、きつと新たなステージに進んでいくのだらうという期待を感じています。

## 小羊学園に春が来る ♪冷たい風が吹いている♪それでも元気に歩こうよ♪

新年度に入り、管理体制・新規採用など新しい体制で各事業所が動き始めました。今回は新施設長となった2名に抱負を語ってもらいました。

※見出しの「小羊学園学園に春が来る」は稲松理事長が若き日々に趣味のギターで作詞作曲したタイトルです。以前はイベントの時によく職員で合唱していました。いつか、どこかで再び聴けるのでしょうか？

### 三方原スクエアの存在と役割

三方原スクエア児童部・成人部

施設長 出水 巖生



前号のつぶえに記載されましたが、三方原スクエア前任施設長の山崎陽司さんが退職・退任され、その責務を私が担うこととなりました。三方原スクエアという施設のみではなく社会福祉法人小羊学園として、また多くの関係施設・団体・機関、そしてお支え下さっている沢山の方々との繋がりがある存在として、その任を引き継ぐことは多くの重責を感じております。まだまだ経験不足の未熟な者であります。皆様からのご指導やご鞭撻を賜りつつその責任を果たしてゆきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願い致します。

私は平成元年にこの小羊学園青年寮に就職をいたしました。もともと聖隷関係の病院や諸施設が立ち並ぶこの地域で育ってきた私はその環境の中で福祉への想いが育まれ、福祉系の大学を卒業した後就職をしました。親戚の中にも知的障がい関係の仕事をしていた者もいて幼い頃から障がい者との触れ合いもあつたこともあり、就職した時も何の違和感もなく利用者の事を受け止めた印象が残っています。

小羊学園青年寮での仕事は一言で表すと「共有することの楽しさ」であつたと思います。小羊学園は重い知的障がいを持つ方々の受け入れを大切にしてきましたが、青年寮の利用者も知的にも行動特性にも対応の難しい利用者が多く、苦勞することも多くありましたが、それ以上に職員同士がその生活を楽しみつつ、多くの生活の刺激をお互いに感じ合ひながら関わり、支援してきたと思っております。

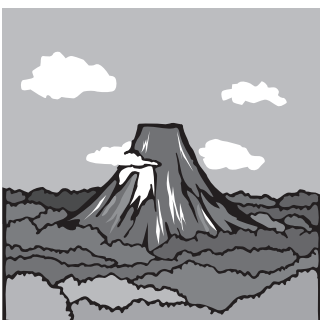
その後制度も支援費制度へ移行され、法人としても通所施設の事業展開を図る中で、平成18年に小羊デイケアホーム（当時は障害者デイサービス事業）へ異動、在宅でご家族と共に生活されている利用者の日中の受け皿として、在宅ならではの利用者との関わりの楽しさ、また保護者との関係などの経験、またそこで施設長という責任も与えられ多くを学ぶことができました。そして3年前の平成22年、小羊学園児童部・青年寮が移転新築したこの三方原スクエアへ支援部長という立場で移ってきました。

三方原スクエアへ移ってきた時に感じた事は、やはり利用者の障がいの「重さ」です。成人部の利用者の方々も小羊学園創立初期から入所している方もおり、自らの表出や意思疎通、生活リズムの保持、意味理解が困難な方等が多く見られます。また児童部は社会状況と家庭環境が変わりつつあり、必要とされるニーズがより複雑になって入所児童の障がい程度や特性もかなり広範囲になってきています。

支援費制度から始まり、これまでの間に制度や利用者支援の考え方も大きく変わってきている中で、これから先、三方原スクエアが担う役割も考えなくてはならないと思いますが、それ以前に三方原スクエアの利用者を見つめ、その支援の在り方を考えつつ、施設の存在の意味

も考えなくてはならないと思います。現在の制度や事業の枠の中ではどうしても対応できないケースが生じてしまう状況もあり、実際に他の事業所に受け入れられない利用者をお三方原スクエアで受け入れた事も少なくありません。重い障がいを持つ方に対する支援の専門性も必要ですが、三方原スクエアでの働きを通して障がいの「重さ」の中に人が人と関わる本質を見出し、それを自分達の仕事のやりがいと感じられる事が必要だと思えます。それは故山浦俊治先生が語られた意味論や関係論に繋がる事でもあり、時代が変わり制度が変わる中で、変わらない存在と役割になるのではないかと思います。

この三方原スクエアの仕事が社会や地域のために、何よりも利用者やご家族のために喜ばれるものとなるよう進んでゆきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。



その人らしさ

支援センターわかぎ

施設長 古橋 誠



この度、前任松原康好氏の後を受け支援センターわかぎ施設長に就任いたしました。若輩者で行き届かないことも多く、利用者・ご家族の皆さま、職員にご迷惑をお掛けすることも多いと思いますが、ともに歩む中でこれからの支援センターわかぎを一緒に創っていきたいと考えておりますので、どうぞご指導よろしくお願い致します。

私は、平成2年4月に小羊学園青年寮に就職しました。青年寮では2年間お世話になり、特に行動特性の顕著な利用者と汗水垂らしながら生活を共にしました。その後、小羊学園児童寮・トマト工房・小羊デイケアホーム・マルカート／ドルチェで仕事をさせていただき、平成21年から支援センターわかぎに副施設長として就任しました。法人内で5回も異動した人間は私だけかもしれません。異動の都度、その場を離れる寂しさや、やり残した感があった、「何故？」と思うこともありましたが、今は

その場所々々で、年齢・障がい程度・業務内容など多岐にわたる仕事を経験し、広い視野を持つことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

支援センターわかぎは現在改築中で26年4月から新しい建物での生活が始まります。利用者の中には、小羊学園に幼少期に入園し、大人になって若樹学園(旧名称)に生活の拠点が移られた方もお見えます。当時、青年だった若者が現在では50歳を超えました。70歳を過ぎた人も3人おられます。創設期には、利用者も職員もエネルギーに満ち溢れ、作業活動を中心に活発に動いてきた人たちが、今では身体機能の低下や慢性疾患と付き合ひながら、身体を労わる日々となっております。こうした状況下で、その年齢に応じた建物環境を整備しよう、バリアフリーはもとより介護機能を強化した水回りや特殊浴槽の設置が予定されています。

ただ、忘れてならないのが、環境が整備されたとしても、そこで暮らす利用者を支えるソフト面の方がより重要であるということだと思います。ライフステージに応じて、その人らしさが発揮できる支援が大切だと考えます。

よく「障害は個性だ」と唱える方がおられます。異論を唱える訳ではありませんが、その意味を考えると私は個性という

言葉でくくりたくないのです。

そもそも、障がい福祉サービスを利用される人たちは、自ら選択して障がいを負った訳ではなく、言い換えれば、好んで障がいを身につけていないのです。故に、障がいを個性と捉えにくいのです。むしろ、障がいを負った彼らが、その人らしい暮らしや自己実現のために、思いをくみ取り、プランニングし、いかに寄り添えるかが大事ではないかと思うのです。私は、個性という言葉に置き換えて「らしい／さ」という言葉をよく用います。「自分らしい」「その人らしい」「わかぎりしさ」「小羊学園らしさ」という具合に。

「らしさ」を辞書で引くと、名詞・形容詞の語尾につけて、そのもの特徴がよく表れている様子を示すと書かれています。「らしさ」は、年齢や障がい程度や置かれている環境に関わらず、その時その場所での人にとつて、自分を発揮できる言葉だと思っております。

40人の利用者は、支援センターわかぎという集合体の一員ですが、お一人おひとりとは個々です。皆さんが「自分らしさ」を発揮できるように願っていますし、自分らしさが発揮できると「わかぎりしさ」につながっていくと信じています。これらを実現できるように職員にも伝え続けていこうと思っています。

まだまだ不甲斐ない部分も多いと思いますが、引き続きご支援いただきたいと思います。よろしくお願致します。

平成25年度 新規採用職員

《浜松地区》

■三方原スクエア児童部

○児童指導員 松野 美穂

○児童指導員 白鳥 絵美

■三方原スクエア成人部

○生活支援員 中嶋 由葵乃

○生活支援員 賀茂 信幸

■支援センターわかぎ

○生活支援員 杉保 友崇

○生活支援員 田中 真菜美

○生活支援員 鈴木 美子

■小羊デイケアホーム

○生活支援員 川上 里美

■ばびるす

○児童指導員 小澤 幸華

■アグネスみなみ

○相談員 岡本 梓

《静岡地区》

■つばさ静岡

○生活支援員 澤野 早織

○生活支援員 田代 裕乃

○生活支援員 渡邊 歩波

○生活支援員 大木 麻実

○生活支援員 天野 朋子

○生活支援員 大川 武司

それぞれの事業所において、若さを武器にエネルギー溢る活躍を期待しています！。

あゆみホーム竣工

賃貸物件でお借りしている共同生活介護「あゆみホーム」が老朽化のため移転新築計画を進め、この度、竣工の運びとなりました。

これまでの北区根洗町から南西に約1キロ、三方原スクエアから300mほど、聖隷クリストファーこども園の南側に引越しとなりました。

建築にはクレヨンしんちゃんのキャラクターでお馴染みの「レオハウス」に尽力いただきました。広々としたリビング、光の入る個室、雨天でも昇降しやすい玄関ホールなど、入居される人たちに合わせた暮らしに配慮されています。入居者は6名。いずれの方も障がい程度は重く身辺自立にも支援を必要されますが、新しい環境の中で、地域の皆さんと交流が深められると期待しています。

地域の皆さま、どうぞよろしく！



あゆみホーム 外観

小羊学園 創立記念講演会

3年後の創立50周年を迎えるにあたり、毎年講演会を開催します。この講演会は創立の精神を再確認するために、創設者山浦俊治先生について、また時代変遷の岐路を小羊学園とともに歩まれた方にお話しいただき、これからの小羊学園の礎にしたいと考えております。

2回目を迎える今年度は、社会事業大学時代から旧友で行政・福祉現場で長くお付き合いのありました神田均氏にご講演いただきます。併せて、24年度に行った東北被災地支援の活動報告もいたします。

どうぞ皆さま、ご参加ください！

日時 7月6日(土) 14時～16時30分  
 場所 聖隷クリストファー大学 3602教室  
 講演 「静岡の社会福祉史における山浦俊治(仮題)」  
 神田均氏  
 小羊学園元監事・現静岡県ボランティア協会長  
 被災地支援報告 「南相馬市の事業所に関わって」  
 南相馬市ピースへの1年間の継続支援の報告

\* 入場無料

\* 駐車場 聖隷学園第1・2駐車場(台数に制限あります)

「ぱるしあ」 始動します  
 小羊学園で4番目となる放課後デイサービス「ぱるしあ」が夏休み前の本格事業開始に向けて動き出しています。「ぱるしあ」は姫街道沿いの西区大山町に開設予定で現在、購入物件の改修作業準備中。先行で、4月から小羊デイケアホームが日中一時支援事業として放課後支援を行っています。これまで放課後デイサービスの少ない北区・西区の就学児童を主な対象に放課後時間や夏休みなどの長期休暇の日中支援を担っていきます。



ぱるしあ 改修工事 入札の様子

ぱるしあが放課後デイサービスとして新たに事業開始する。私がドルチェを立ち上げた時には、まだ制度も脆弱で浜松市単独補助事業のわずかな収入で赤字経営していたことを思い出す。現在では、市内に当時の5倍程の事業所が運営されている。子どもの豊かな放課後時間と両親の就労サポートという観点でも重要な事業であることは間違いないが、ともすれば親が子どもと向き合う時間をなくしてしまう危険性もある。地域の中で、ご家族が上手に生活できるためのサポートとして展開されることを願う。初夏の香りが漂い心地良い季節、どうぞ皆さまお身体ご自愛下さい。(F)

編集後記

小羊学園を支える会

2013年度寄付金報告

3月受付分 980,715円 (25件)  
 累計 6,735,943円 (449件)

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座 00800-8-107785  
 口座名義 社会福祉法人小羊学園  
 ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785  
 口座名義 社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。  
 小羊学園を支える会事務局(鈴木)  
 三方原スクエア内 ☎ 053-414-1833